

佑 啓



ふる里学会・和田清
〒290-0265 安房郡和田町黒岩 1190-1
tel 0470-40-7227
mail fgakusya-wada@blue.ocn.ne.jp

社会福祉法人 佑啓会
http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/
発行者 里見 吉英
編集者 三股 金利

ふる里学会 〒290-0265 市原市今富 1110-1
tel 0436-36-7611 mail fgakusya@peach.ocn.ne.jp
ふる里学会アネッサディセンタ― 〒299-0115 市原市津津 1131
tel 0436-60-7677 mail fgakusya-anessa@cd.wakwak.com

勝手におしやべりしてみました

里見 吉英

成年後見制度というのは、手続きを始めてみますと、やはり一般の人には馴染みにくいと言え、取っつきにくい制度である事は確かです。

実際にはどうしたら利用者本人の生活を守れるのかという、その辺から入っていく事が大事なことのように思います。成年後見制度ができたから、すぐにそれをやらなければいけないとか、やるのならどうしたらいいかとか、というように身構えて入っていくと気が重くなってしまいます。本人名義の預金があり、それを動かさずとすると面倒なことになったり、お父さんが亡くなったとか相続が発生し、必要に迫られてこの制度を利用しているといえます。

知的障害者と成年後見制度

禁治産制度が改正になって新しい成年後見制度になったときに、これはいい制度になるんだろなという期待を最初保持していました。しかし、県の研究会とかに名前を連ねて委員活動をやつてきて、そういう研究会の委員の方たちに知的障害が、あまり理解されていらないというところが問題にもなっています。この制度は法務省がつくりましたが、その法務省の方でもそうだったと思います。対象者の中心はやはり高齢者です。痴呆性老人の方たちが議論の中心になってしまっています。ですから、任意後見とか法定後見の補助、保佐または後見とかいった判断能力に欠けた区分をつけた制度になっていますが、知的障害者の場合には後見までいってしまふような、もの言わない利用者が圧倒的に多いのが実情です。



「もの言わぬ利用者」と「もの言えぬ家族」

「もの言わぬ利用者」と「もの言えぬ家族」のためにということ。これは、うちの職員に常に言っていることです。これをいつも頭に入れておかないと間違ふと。

本人たちは生活している中で、本当に言いたいことを言っているのか。これはまず絶対といつてよいほどのものを言っていない。一方、家族の方が本当に我々に言いたいことを言っているのか。これも言っていないといふことをいつも頭にに入れておかないといふこと。

この「もの言わぬ利用者」と「もの言えぬ家族」のためにあるのが、成年後見制度であると考えています。

ふる里学会では、コーディネーターと生活支援コーディネーターが地域の支援をしておりますが、よく話の中にでてることは、一番この制度を必要としている方というのは、本当は「もの言えぬ家族」ではなく「もの言わぬ利用者」ではないかというところなのです。要するに本人に対してネグレクトしたりする家族です。また、「もの言わぬ利用者」と「もの言えぬ家族」という言葉があまりにも多い。言い過ぎる家族も少なくありません。何故かと言いますと、親の価値観が壊れて、本人を振り回してしまふからです。

中核地域生活支援センター構想

利用者の地域生活の面で、権利擁護を図る成年後見制度とともに重要と考えているのが、中核地域生活支援センターという構想です。国が各地域にコーディネーターを配置するという地域療育等支援事業が始まってから、もう八年近くになりますが、突然国から手を離れてしまつて、県単独の事業になったわけなんです。中核地域生活支援センター構想については、千葉県民のほうで検討をすすめてきましたが、ほぼ決まつたところなんです。これは地域療育等支援事業を法的に改編するという事で、中核地域生活支援センターを県内各十四保健福祉圏域に設置し、これを相談の窓口にしていくというものです。

しかも、今までのようなコーディネーター一人の配置ではなく複数の相談員を配置し、身体障害者、精神障害者、児童、高齢者までを対象としております。要するにこれはワンストップでいいと考えています。相談を受けて、サービスにつながる。高齢者の方の相談であれば介護保険の事業所につなげるとか、精神障害者の方ですと、保健所や病院のケースワーカーにつながるのか、ワンストップの機能を持たせようというものです。地域で暮らす人たちのためには、これが一番役に立つ相談機関になるのではないかと思います。まあ、きつんと機能すればの話ですが。



家族の想いと施設との関係

昨年の八月に、短期入所時々施設を利用されている方のお父さんから、突然施設に三紙が来ました。働いている娘さんが結婚するので、記念に両親と妹さん3人でハワイに海外旅行に行きたいと言内内容でした。海外旅行に行つてもいいプロにあらうら困る、飛行機が落ちたからどうしようというところを考えた末のことでしよう。「何かありましたら、預けています。本人の今後のことは施設にすべて任しします。どうかよろしくお願ひします。」と書いた文書には、はるまで押し返してありました。

これにはもつとびっくりしました。本人の意向はともかくとして、信頼されているかどうかという観点からすれば、これは我々にとつてはうれしいことなのです。というのは、この家族の場合、言い換えては親亡き後のことを心配され、その際は、私も施設の施設に託したいということだと思ひます。親亡き後、誰に、どのような機関に、またどの施設に子供さんを託すかは親の判断です。親御さんたちが元氣なうちに、これからは安心だといふ体制をとられる事でしよう。それに応えられる施設に我ががしていかなければいけないと考えます。親亡き後を誰に託すかというところになると、第三者という考えが出てきます。しかし、知らない方に後見人になつてもらつて、身上監護もやつてもらふ、財産管理もやつてもらふ。それで本当に安心できるのでしょうか。私はそうは思ひません。

法人後見の考え方

個人の第三者による後見が安心できないとしたら、ではどうしたらいいか。どのような形を整えたらいいか。それはやはり家族会だと思ひます。家族会が中心となつて、有識者等を仲間に入れながらNPO法人を取得して、本人の法人後見をする。今、私はこれが一番ではないかと考えています。以前、私は社会福祉協議会がきちんとやればいいのかと考えて



いました。ところが、重い腰がなかなか上がりません。一つ一つの理由ですが、本当は親御さんかみで社会福祉協議会がいいのかというところになると、それはまた違うと思ひました。それだつたら、自分も加入して家族会がNPO法人を取つて法人後見をする。そして、監督人にきちんと第三者を立てて、そのNPO法人を監督してもらふ。そしてその子の生活がきちんと守られているか監視してもらふ。これが現状ではベターな方法かな。そういう話を今、家族会へ投げかけているところです。この場合、施設の家来会というのは、どうしても施設にたかかつてしまふものだから、結果的には、施設が主導するかなつてしまふと、母体の施設の考えや意識がNPO法人に色濃く反映されるという恐れが出てきます。これは危ない。後見のためと言ひながら、そのためになつたとか、財産管理のことなども危険なことがかかぬ、そういう心配がでてきます。また、利益相反の問題も出てきます。施設側、要するにサービスを提供する側とサービスを受ける側、本人さんたち。この両者が利益相反にあるというのは一般社会の常識上いたしたくない。しかし、我々利用者や利益相反だなんて思つたらこの仕事はできません。社会的には、利益を共有しているのだという立場で知的障害者をやっています。一生懸命頑張つて地域福祉をやっている人たちというのは、利益相反だつたら、その人たちのためには一生懸命にはなりません。そう思うのですがいいかです。

《理事長》

全千葉県福祉士会主催の「JGJWM」的的障害者の成年後見と生活支援に関する、登壇より。

支援してくれる人

いづばい

井口 高子

皆様が忙しい季節となり、今年も始まりの時を迎えました。

我が家は、父・母・娘、息子の四人家族です。いわゆる典型的な家族構成ですが、ちょっと違うのは、息子の翔太が、知的障害をもっているという事です。翔太は、翔太中心の生活になりませんし、私達は、翔太に振り回されているというのが正直な感想です。

翔太は、現在小学三年生で、養護学校に元氣よく通っています。また、言葉はないのですが、マカトンサインという手話的な方法で自分の意思を表すことがやうとできるようになってきて、それが家族の間や学校の先生とのコミュニケーションの助けになっていきます。最近の翔太は、幼児期の頃には考えられない位、落着いてきています。

さて、私がふる里事業を知ったのは、翔太が学校に入学した年の施設見学で、学舎を訪ねた折だと記憶しています。

広いスペースで、綺麗に手入れの行き届いた建物。そして、職員の方々が元氣にはつらつと挨拶される姿に感激して、ふる里学舎に対して良い印象が残ったことを覚えています。さらに嬉しいことに、翔太が養護学校に通っていた頃にお世話になった劉先生が、学舎におられて、思わぬ再会ができたことは、二重の喜びでした。

ニーディーターの飯田さんに相談して、短期で利用する為には翔太を通いました。とにかく、職員の方の対応が優しいことが印象的でした。「お母さん、大丈夫ですよ。心配しないで下さい。僕が見ていますから」と言葉をかけてくれたのは、富崎さんでした。富崎さんも学舎に就職されて間もない頃だったのではないのでしょうか。一生懸命に翔太に接してくれていると、私も、そして一緒に通っていた娘も感じたものです。

夏の学舎でのイベントにもお誘いを受けて、親子四人で参加させて頂きました。翔太のことを分かってくれているという安心感もあって、のびのびと本当に楽しい一日を過ごすことができました。昨年度(平成十五年)より、支援費制度が始まりました。早いもので、もう一年が過ぎました。我が家の翔太の場合は、学校が終わってデニサ

ービスを、土・日曜日には短所入所を利用して貰っています。アネッサや学舎で散歩したり、ボールで遊んだり、ギターを弾いて貰ったり、ビデオを借りたり、お絵かきをしたりと翔太は職員の方と一緒に余暇を楽しんでいるようです。私共はお陰様で翔太を安心して預けることができています。

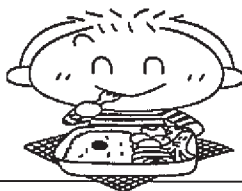
その貴重な時間を、日頃はどうしても翔太中心になってしまっていて、じつくりと相手をしてやれない娘との時間になっていきます。小学校高学年になったとはいえ、まだまだ母親が恋しい年頃です。「この時間は、お姉ちゃんとお母さんだけの時間」ということも大切な時期だと思っています。更に嬉しいことに「私だけの時間」も出来て、趣味も持てる様になりました。ただし、自分の趣味で始めたことも「将来、翔太と一緒に出来るようにな」といついつか考えてしまつたので、我ながら苦笑してしまっています。

先に翔太に振り回されているように、と書きましたが、そと気が付くと、そんな翔太を中心にして、「翔太は、一言一言とるんやない?」「いや、いや、まっとうあの時のことを思い出して、言っているよ」と我が家は随分と賑やかに話をしていく様になっています。親の願いは、可愛いがられる子どもに育って欲しいという事です。

思えば、翔太の周りには、翔太を色々な形で支援、広げてくれる人が大勢いてくれることに気が付きます。おじいさん、おばあさん、お母さん、お父さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん、お友達、そして近所の人達・・・と、たくさんの方に囲まれて翔太は育っているのだという事に気が付きます。翔太には、色々な場面で見学的に教えていくことが大切だと感じているので、翔太のことを分かっている方から教えてくれるという事は、何よりも有り難いことです。

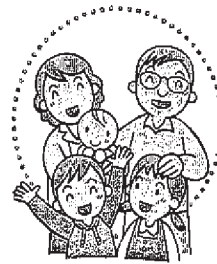
翔太は、これからは色々なことをゆつくりと時間を掛けながら分かっていくことでしょう。多分、親の私も一緒です。

翔太を支援してくれる人がいつだっていてくれることに感謝をしつつ、これから良い出会いがあったら、



くんあることを楽しみにしています。そして「おたがい様」で、私に出来ることは、お手伝いしていきたくと思っています。

(井口 翔太母)



一カ月を振り返って

内山 尚子

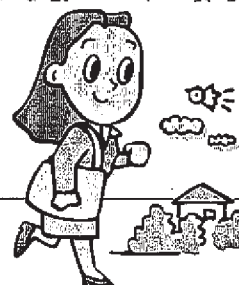
学舎で働き始めて一ヶ月が経った。この一ヶ月、あつという間に過ぎたが、たくさんのお話を発見し、感じ、考えていった一ヶ月であった。

私は、生活係の2寮に配属された。生活係、どのような仕事をしていくのだろうかという期待と不安でいっぱいだった。そして、毎日、寮生のハミガキ、掃除、居間清掃、居間整理、ベッドメイク、洗濯をしていく。入舎して最初の頃、私は正直なところ、これが生活係なのかとんだか素直に切れない気持ちだった。今まで四日間、大学や社会福祉を勉強してきたのに、一体自分は何なのだろうかと思ってしまった。しかし、ある時、私のこの気持ちも、やした気持ちを一掃させた出来事があった。生活

会での職員と寮生の話し合いに参加した時のことである。一人ひとりの寮生の生活の様子を、1寮から2寮まで3寮と生活係の職員が話していく。それについて、一人ひとりの状況を早見施設長が「これはどういうことなのか。これはどうした方がよいのか。」「と、鋭く質問したり、違う角度から提案をし、それに各寮の職員が答えていく。職員と寮生が皆で考えを出し合い、「もっとこうした方がよいのでは。」「と次々と意見を出して、今後の対応を決めていく。私はこの流れを見て、「ああ、わかった。生活係とは、こういうことなのだ!」と思った。ただ、寮の掃除をしたり、洗濯やベッドメイクをしたり、食事準備やハミガキを介助をする。それだけでなく、寮生一人ひとりを、見て、これからの生活をよりよいものにするにはどうしたら良いかを決めていく。生活係は、とても大事な仕事をしているということがわかった。と

同時に、本当に責任の重い仕事なのだとも気が引き締まる思いがした。この時から、私もまた気持ちちはなくなり、このように真剣に寮生の生活を考えている学舎に居られることを嬉しく思い、それと同時に、生活係として生活をより良いものにするために、今の仕事を責任を持っていくという考えがよくなった。

学舎に入り、一ヶ月、仕事をとおし、職員の姿勢から教わったことがある。「福祉に終わりはない」ということである。本当に、福祉というものが完成はない。人が生活をしていくのだから、当たり前のことかも知れないが、障害をもつ方によりよい援助をしていくことが、終わりはないと私は思う。私たちが福祉に携わる者が、「それでいい。」「こまめでいいや。」「と妥協をしてしまったら、その方の生活はそこから前へ進めないのだ。常に、より良いものを目指して、私たちの使命なのであると思う。それを教えてくれたのが、生活係や職員と寮生との関わり



である。日々やがてくる様々なことに対して、職員皆で話し合い、「どうやっていく?」「と決めていく。様子を一ヶ月間見てきて、妥協なんて一つもしないで、常により良い生活を援助していくという、この大切さを私は学んだ。私も、このような責任ある仕事をさせて頂けることに感謝しつつ、自分の仕事に誇りを持って、これから関わっていく。

福祉には終わりがないけれど、やはりその答えは、寮生との関わりの中から見えてくると感じた。先日、寮2の中からお見えたことがあった。とある日曜日のこと。休日のなかで作業は休みで、デイルームや自室のんびりと過ごしていた。午後になって、デイルームのソファに座っていた寮生が、突然立ち上がり私の方に向って来た。そして私の手を引いて、腕時計を指し「2時50分!」と言ったのである。私は驚いた。なぜ驚いたかという、その方は普段あまり話さないの、私は勝手に話さない人なのではないかと思込んでいたからだ。だからその2時50分と言った時、私は、この方は誰といる時間かわかると知り嬉しくなった。そして、その時間を言ったこと、それにも意味があったことにも私は気が付く。更に嬉しくなった。「2時50分」という言葉にどんな意味があったのか。2時50分：おやつ時間の10分前である。その寮生が私を引っぱる時間を言

ったことの意味。それは、「もうすぐおやつ時間だから、厨房からおやつを持って来て」のサインだったのだ。私は笑ってしまった。その寮生もニコニコした。私は共におやつをもらいに厨房へ向かいながら、自分についてきた。私はまたまた寮生のことを何も知らないな。と、一部分しか見ないでわかったつもりにならないうようにしたい。これからお付き合いしていく中で、新たな部分を知っていくのが楽しみである。

(支援員)

編集後記

今号より事業の拡大に伴い「佐藤」「ふる里から...」を一部リニューアルしました。今年度より100名様の職員になり、必要条件である更なる資力向上と職員間の連携...。その中にある自分も常にモチベーションを高く維持することが必要ですが、この機関紙発行後は、ちょっと息抜きしたいものです。

佐藤五十一号をお届けします。

宮崎理